展示評

「糸のみほとけ」展の展示評

白鶴美術館顧問　山中　理

「糸のみほとけ」とはなんとはんなりした響きでしょうか。まず、題に惹かれました。そしてこの展覧会で教えられましたが、鎌倉時代以降にこれほど豊かな繡仏の世界が繰り広げられていたとは夢にも思わず、ましてや、中国の繡仏（第五章）はほとんど念頭にものぼったことはありません。少し考えてみればそこが出発点なのにお恥ずかしい限りです。

いつもなら最後に降りていたスロープを逆に上って左に曲がりますと、目に飛び込んで来たのが第一章の「天寿国繡帳」（中宮寺蔵）で、画期的な展示構成の幕明けです。展示位置が刺繍の細部を肉眼でも鮮明に見て取れるほど近く、浮世絵版画の微妙な凹凸同様、間近でこそその醍醐味を味わうことが出来ます。即ち、発色の美しい諸撚糸を使用した単純で力強い返し繡の飛鳥時代の原刺繍に比して、素人目には無残なほど薄茶色に退色してかなり劣ると思えた甘い撚り糸と撚りのない平糸を併用した鎌倉時代の新刺繍が実は多彩な繡技を駆使していると知った時、この繡帳に対する向き合い方が些か異なって来たのです。

三点出品された白鶴美術館の作品の内、「金銅小幡」の展示の仕方はユニークで意表を突かれました。「金銅小幡」は金銅板全七坪が蝶番で繋がれています。七坪目に当たるこの小幡最下段の金具に、本来繡仏裂の類を挟み込んで垂下させており、小口部分に残ったその幡足裂の痕跡を見せる工夫がなされていました。その代り、あくまで金工に興味を抱く立場からですが、北壁側の全長約二七メートルの展示ケース内に陳列された、大きな灌頂幡の傍らにある「四隅小幡」（東京国立博物館蔵）の横笛を吹く天人が、「金銅小幡」のそれと微妙に違う造形感覚を示していることを比較検討するには難しいと感じました。

圧巻は何と言っても第三章の国宝「刺繍釈迦如来説法図」（奈良国立博物館蔵）です。特に中尊倚坐像の直下左右と最下段列で柄香炉と塔形盒子の両方を捧持供養する俗人一人と僧侶三人（うち一人の塔形盒子は脱落）をこれほどの近さで確認出来て感無量でした。三回目の見学でやっと気付いたのが、菩薩では一番右下に位置するその裳の上に、最初は塔形盒子の一部と見誤った水瓶の断片が貼られていたことです（保存修理の際、検討の末、そのままにされました）。展示ケースの能う限り前で垂下させたこの繡帳を見つめながら、担当者の決断、意気込みのほどを強く感じていました。

こういう大胆な試みがなされる一方で細やかな配慮に基づく繊細な展示方法も採用されています。平置き展示ケース内の刺繍残欠は裂帖（白鶴美術館蔵）の見返し横の冒頭ページに貼られているのですが、繋ぎの紙蝶番が剝がれている箇所もあり気になっておりました。窓を設けた全体を覆う白い箱を被せることで、目障りな部分を隠し、刺繍裂だけが見えるようになっています。北側の壁付き展示ケースでも別の裂帖に同様な工夫が施されていましたが、その隣の小さな古裂帖だけは見返しも含めて全形を見せていたのです。作品の状態が良いので折帖の姿を見て戴くためにそうされたのでしょう。

第四章、第六～八章の展示は繡技が多様化し工芸的な美を極めた黄金期、極楽往生への願いを込めて毛髪を使用した髪繡の登場、最後に超絶技巧とも称すべき高度な繡技が施された近世の繡仏作品の登壇へと導かれて大団円を迎えます。その内、第四章に当たる展示室に置かれた行灯型展示ケース（挿図）を見て嬉しくなりました。大きな直方体の箱がケース内に納められ、四面のガラスとほとんど至近距離にある各面に繡仏が掛かっていて、叶うならば直に作品を味わって貰いたいという気持ちがここでもひしひしと伝わって参ります。正にこの「糸のみほとけ」展の担当者はものに対する愛情が半端ないほど豊潤で、観者の五感に訴え掛ける展示を実現された努力に対し満腔の敬意を表したいと思います。

展示風景